

物的世界に意識をもって直面する、  
日常に追いまくられる。

ここにさらに、意識しなければなら  
なくなつた大きなもののひとつが、  
「環境」である。

これまでの、生活をおくるための住  
みよい住まいに影響の濃い、たとえば  
騒音であるとか、交通の便、医療・治  
安、買い物・役所・郵便局、病院学校  
等の施設の利便性、周りの景観、など  
などの条件。

これらは誰にでも生活の身の回りの  
快適さとして、日々直接、働きかけて  
くるのですぐわかる。

ところが、このころは、こんな身近  
なものを飛び越した、地球規模の、人  
類にとつての環境、に意識をもたざる  
をえなくなつた。

その意識は日常生活を送るひとが、  
具体的なものから想像力で補ひ、当た  
り前のようにもたなければならぬ意

## 「環境」が招く

物的世界に向き合ったときの、ひと  
の「快」という「心地」は、ずっと  
「快適」ということになってきた、と  
さきに述べた。

しかし、物的世界に直面しながら、  
日常生活を牽引する意識に眼をやると、  
「快適」とは違うものが呼びこまれて  
くる。

いまや無意識に日常生活をおくる、  
といった人は皆無にちかい。いや、ひ  
とは意識を持って日をおくらなければ  
ならない。(それだけで疲れてしまふ  
ことも多いのだが)

日々、物的世界に直面しているなあ、  
と実感を得るのは、日常生活のマナー  
ジメントだろう。

まかせっきりのお父さんや、お手伝  
いさんに自由にしてもらおう主婦はべつ  
だろうが、ひとりであろうが家族であ  
ろうが、なにを食べ、どこで魚をとつ  
てきて食べるのか、そのためにはいつ  
までどこでなにを用意しておかなけ  
れば、またいつゴミをだしておかなけ  
れば。

汚れてきたから掃除をしなければ。  
洗濯はどれとどれをいつまでに……。

識になつた。

自然環境の破壊、毎日の天気のみだ  
れているのは温暖化だ、自分達の出す  
二酸化炭素を抑制しなきゃ、ゴミ収集  
の分別だ、地球に優しいエコだ、エコ  
関連グッズだ、などと日々煽られ、脅  
され、おちおちしたものではない。事  
実に基づく危機感に溢れている。

「環境 (milieu) といふ言葉は、元来  
真ん中といふ意味であつて、真ん中に  
何かなければ、無論周りに何かあるわ  
けではない。」(小林秀雄「環境」と  
いわれるような「環境」がまずある。  
取り巻いている周りのことであつても、  
真ん中のなにかから発想される「環  
境」である。たとえば「わたしの環  
境」というように。

ところが、それに対し、いまだに完  
全解決とはいえない各種公害病の、発  
病(水俣病は五十三年)と原因究明、  
責任追及の闘いなどを中心として、七



え・安原喜秀

十年代ごろから一般に流布されるよう  
になつた「環境」は「〇〇環境」では  
なくて、ただ「環境」として歩き始め  
る。(一九七一年に「環境庁」が発足  
する)

この「環境」(environment) はあ  
きらかに、生態学からもつたもので  
あり、その中の一ジャンルとしての人  
間生態学を想定しているのである。真  
ん中は当然人間であるのだが、生態学

ではもつとはつきりしていて、「環境」  
は、その生物(この場合、人間)の  
「具体的な生活空間(あるいは場所)」  
をさしているのである。

だから当然その「環境」は、私たち  
の生存にかかわる「具体的な生活空間  
(場所)」が脅かされているという認識  
のなかで浮上してくるものなのである。  
「具体的な生活空間(場所)」が想像力  
によつて、地球にまでひろがる。

私たちの「具体的な生活空間(場  
所)」をあの身近な住みよさだけでは  
なく、日々地球規模にまでつなげて想  
像し、意識しながら生きる、となつた  
とき、物的世界にくつついてきていた  
「快適」という「心地」とは別の、「居  
心地」こそが有力な力を發揮してくれ  
る。遠いものを包むようにして、近く  
にしてくれるのである。

近年の居心地への関心は、この「環  
境」を身近なものにする「居心地」の  
役割がとて大きいと見られる。